慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一見順調に見える企業の潜在リスク : G社の今後の成長へむけての示唆
Sub Title	
Author	李, 洋希(Lee, Yanghee) 河野, 宏和(Kono, Hirokazu)
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2016
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2016年度経営学 第3126号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002016-3126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士課程

学位論文（　　2016　年度）

論文題名

一見順調に見える企業の潜在リスク

―Ｇ社の今後の成長へむけての示唆―

主　査	河野宏和　教授
副　査	坂爪　裕　教授
副　査	村上　裕太郎　准教授
副　査	市来嵜　治　専任講師

氏　名	李　洋希

論 文 要 旨

所属ゼミ	河野 研究会	氏名	李 洋希

（論文題名）

一見順調に見える企業の潜在リスク
―G社の今後の成長へむけての示唆―

（内容の要旨）

株式会社現代工業（※以後G社と記載）は鉄、ステンレス、非鉄金属、特殊金属などの薄板を加工し、建築部品や陳列・装飾部品を製造する会社である。1991年に実父である森田宗弘（李憲喆）が会社を創設し、小規模な設備から事業を始め、徐々に取引先数を拡大して売上を成長させた。2001年には実母である大橋玲子が社長となってG社を法人化し、設備投資を行い、当時最新鋭のレーザ設備を導入し、既存取引先からの需要拡大と新規顧客の獲得を実現した。その結果、仕事量の増加に伴って社員数も増員することが可能になった。

しかし、2007年のリーマンショック後、世界全体の景気悪化は大阪にももれなく悪影響を与え、G社の主な事業分野である建設関連の受注が半減し、翌年2008年にはG社は初の赤字決算となった。2009年頃には受注減のあおりを受けて廃業を余儀なくされた取引先も現れ、社内に不安が拡がる時期もあった。そのような外部環境下でG社が持ち直すことができたのは、先行導入した設備によって可能になった加工品需要の増大による売上増加であった。つまり、建設関連品だけではなく、新セグメントの顧客獲得ができたことが大きな一因である。突然に業界全体を飲み込むような大きな外部環境変化のリスクに対して、先見的な設備の先行導入によって乗り越えることができた。

G社が2009年に経験した経営悪化は、今後いつまた来てもおかしくはないと私は考えている。その時に私は同社社員として、あるいは経営者として、どのようにそのリスクに備えるべきだろうか。建設関連製品に依存しすぎていたため生じたリスクを、最新設備によって事前に対処した現社長のリスクマネジメントのプロセス、現場で機械設備を使う職人の技術力、取引先の思い通りの図面を作成するCADチームの存在。いまG社にある経営資源（ヒト、モノ、カネ、情報）を十分に理解し、活用することで、そのリスクに備えることが可能だと考えている。

私は、商人の町大阪に小さな工場を興した父の意思を継ぎ、経営者となった母を支えるべく、できる限りの知識と経験を持ち帰りG社に貢献したいという思いを強く持っている。

本研究は、G社で行ったフィールドワーク、社長や社員・取引先へのヒアリング情報を基に、社内の現状分析を進め、G社が直面している課題を洗い出し、顕在リスクの背後にあるまだ見えていないリスク、すなわち潜在リスクを発見すること目的とする。さらに今後のG社の展望を見据え、潜在リスクへの対処方法を具体的に提言し、そうしたリスクへの対応を視野に入れた経営理念のあり方について考察している。